

平成21年度

第35回 越谷市民まつり

NPO法人・越谷市郷土研究会 展示出品紹介

越谷市中央市民会館4F
平成21年9月27日(日)
午前8:50~午後4:00



『武蔵国三十三箇所観音霊場巡りと越谷』

加藤幸一

『江戸明治の越ヶ谷町・大沢町の大火』

高崎 力

『よみがえる90年前の越谷・

大正時代の国産卓上電話と越ヶ谷電話番号簿』

原田民自

武蔵国三十三箇所観音霊場巡りと越谷

加藤幸一

三十三箇所(「三十三所」(さんじゅうさんじよ))とは、観音菩薩像を安置した三十三箇所の霊場(寺院)をさす。観音菩薩は願いを求めている人々の能力に応じて三十三の姿に変えて救うと言われ、この三十三応現身の考えに影響されて設置されたのである。代表的な観音霊場に「西国三十三箇所」、「坂東三十三箇所」、「秩父三十四箇所」(もとは三十三箇所であった)があげられる。この観音札所巡りは弘法大師の八十八箇所巡りとともに江戸時代は庶民の間で盛んに行われ、必ずご詠歌を唱えながら巡礼していた。

武蔵国三十三箇所の霊場は、武蔵国の東南部、主に中川流域に集中していて現在の吉川市、三郷市、葛飾区、八潮市、足立区、川口市、越谷市、松伏町にまたがっている。吉川市吉川の延命寺を一番としてスタートし、同じく吉川市川藤の三十三番の東泉寺で終わる。次に三十三箇所の中の越谷に関する霊場と、そのご詠歌をあげると、次の通りである。

二十七番 越ヶ谷の観音堂

観音横丁にある観音堂(越ヶ谷五三六一六〇)で、天嶽寺の持ち分である。
「気の払い 大悲の弓に 知恵の矢は 離さで悪魔 除く越ヶ谷」

二十八番 西方の五郎兵衛屋敷(観音堂)

越谷市消防署大相模分署前の道路の斜め(北東)反対側(相模町六丁目)にある墓地及び番場集落センターあたりにあって、斉藤五郎兵衛が住んでいた。
「天つ原 大悲撰取の 雲晴れて 光り輝く ここが西方」

二十九番 東方の観音寺

大成町一三二二六二にある寺院である。
「大悲にも 濟世第一 突つきつつ 東方こそ 補陀落の里」

三十番 増森の観音寺(観音堂)

現在の増森一六八〇の観音堂墓地にあった。宝正院の管轄下にある。
観音寺の名残である観音堂は、すぐ近くの宝正院の境内に移転している。
「一切の 衆生済度の 大悲にて 日々に新たに 増森の寺」

三十一番 増林の林泉寺

増林三八一八にある寺院である。かつては『子安観音』として知られていた。
現在、子安観音を祀る観音堂が境内にある。
「行き暮れて 野寺の鐘の 聞こゆるは この下影が 増林寺」

参考文献

- ・大相模真大山大聖寺 第十六世円妙上人 記(元文三年(一七三八))の
中の『武蔵三十三所観音巡礼縁起』
- ・越谷市郷土研究会第一三三回研究発表会資料「越谷周辺の諸巡礼」(高崎力)
- ・足立区伊興の実相院発行の「観音霊場巡拝のしおり」

武蔵國三十三箇所新観音霊場のいし歌歌 (原文)

第一番 吉川・延命寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第八番 高宮・観音院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十五番 雑又・道照院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十二番 大曾根・鎌台寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十九番 東方・観音寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二番 平沼・智勝院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第九番 中曾根・観音寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十六番 飯塚・空福寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十三番 伊興・実相院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第三十番 増林・観音寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第三番 関・普門院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十番 桑糸・実相院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十七番 大瀬・太郎左衛門

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十四番 澁沼・普門寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第三十二番 増林・林泉寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第四番 中井・東照寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十一番 桑宮・兵左衛門

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十八番 川崎・仁兵衛屋敷

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十五番 赤井・田通寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第三十三番 岩平・観音寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第五番 中野・万福寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十二番 桑成・圓福寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十九番 木曾根・普門寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十六番 赤山・西福寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第三十三番 川崎・東泉寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第六番 三輪野江・定勝寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十三番 番匠免・迫深院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十番 鶴ヶ巻根・宝蔵寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十七番 鶴ヶ谷・観音院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第七番 高久・密勝院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第十四番 戸ヶ崎・密勝寺

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十一番 八条・清勝院

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第二十八番 西方・五郎兵衛

あまのつらみ
あまのつらみの
あまのつらみの
あまのつらみの

第一番「延命寺」
補陀落や
岸打つ波の
芦川(吉川)も
那智の御山と
同じ響きを

第十番「実相院」
頼もしや
真如の月の
雲晴れて
有為の關路を
照らす実相

第十九番「普門寺」
御堂をば
かねて誓いの
国ならば
たとい木首根に
光り無くとも

第二十八番「蓮台寺」
天つ原
大悲振取の
雲晴れて
光り輝く
ここが西方

第二番「智勝院」
この寺の
大悲の誓い
いや増して
ただ平沼に
法の花咲く

第十一番「新井寺」
父母の
育て上げにし
恵みにぞ
孫彦富の
栄え久しき

第二十番「三輪寺」
千代かけて
変わらぬ誓い
今ここに
巡りて鶴が(鶴ヶ)
首根にこそ若く

第二十九番「観音寺」
大悲にも
落世第一
突つきつつ
東方こそ
補陀落の里

第三番「普門院」
ただ願い
大悲の船の
出でる間に
乗り遅れては
心急ぎ(関)らむ

第十二番「西福寺」
巡り来て
この里々の
尻玉には
大悲の光
移る彦成

第二十一番「観音堂」
一葉の
蓮座に座すも
大悲にて
さても広さよ
八丈(八条)の床

第三十番「観音寺」
一切の
衆生済度の
大悲にて
日々に新たに
増森の寺

第四番「東照寺」
出でる日も
入る日もここに
東岸寺
中井の水に
光り輝く

第十三番「迎授院」
昼となく
夜にも響く
番匠免
夢驚かす
法の地音

第二十二番「蓮台寺」
巡り来て
又この里に
大首根や
大悲大悲の
誓いなるらん

第三十一番「林泉寺」
行き暮れて
野寺の鐘の
聞こゆるは
この下影が
増林寺

第五番「万福寺」
植えて見よ
菩提の種の
万福寺
穢土と淨土の
ここが中島

第十四番「常樂寺」
哀れ只
大悲大悲の
誓いには
漏れても救う
戸ヶ崎の寺

第二十三番「実相院」
生まれ来て
又この里に
横沼寺(せうじ)※
大悲の誓い
威光(伊興)身に受く

第三十二番「観音寺」
光明は
遍く照らす
誓いにて
移りにけりな
岩平の寺

第六番「足勝寺」
ただ頼め
大悲の誓い
定勝寺
身は野に捨てて(足勝)
浮かぶ世も有る

第十五番「遍照院」
一寸の
善きには尺の
遠ヶ又
導き給い
六つの巻を

第二十四番「普門寺」
大悲には
如來弘誓の
船もまた
連れて乗り来る
蓮沼の里

第三十三番「東泉寺」
水上は
幾世経ぬらん
この流れ
大悲の御手を
すすぐ川藤

第七番「密蔵院」
皆人の
願いはここに
密蔵院
菩薩の誓い
有りぬ高久

第十六番「安相寺」
我人の
諸願をここに
夕顔の(夕顔観音)
花のうてなに
法の飯塚

第二十五番「円通寺」
有縁より
無縁にまでも
縁通じ
慈悲の赤井に
星も移れり

※第十五番の
「尺」は、一尺の
ことで、一寸の
十倍であるとの
意味が含まれる。

第八番「観龍院」
利根川の
流れに繞く
龍巻院
岸打つ波に
法の音聞く

第十七番「神立寺」
幾億か
衆生も去らぬ
誓いにて
言の古里
ここに仰せは(大瀬)

第二十六番「西福寺」
東雲の
又晴れもせぬ
その内に
大悲の光
移る赤山

※第二十三番の
実相院は、横沼寺
(横沼)の別当。
また、「いこう」は
威光の意という。
(実相院に住職より)
※伊興の実相院
発行の「観音霊場
巡拝のしおり」の
中の御詠歌を
漢字混じりで
表した。

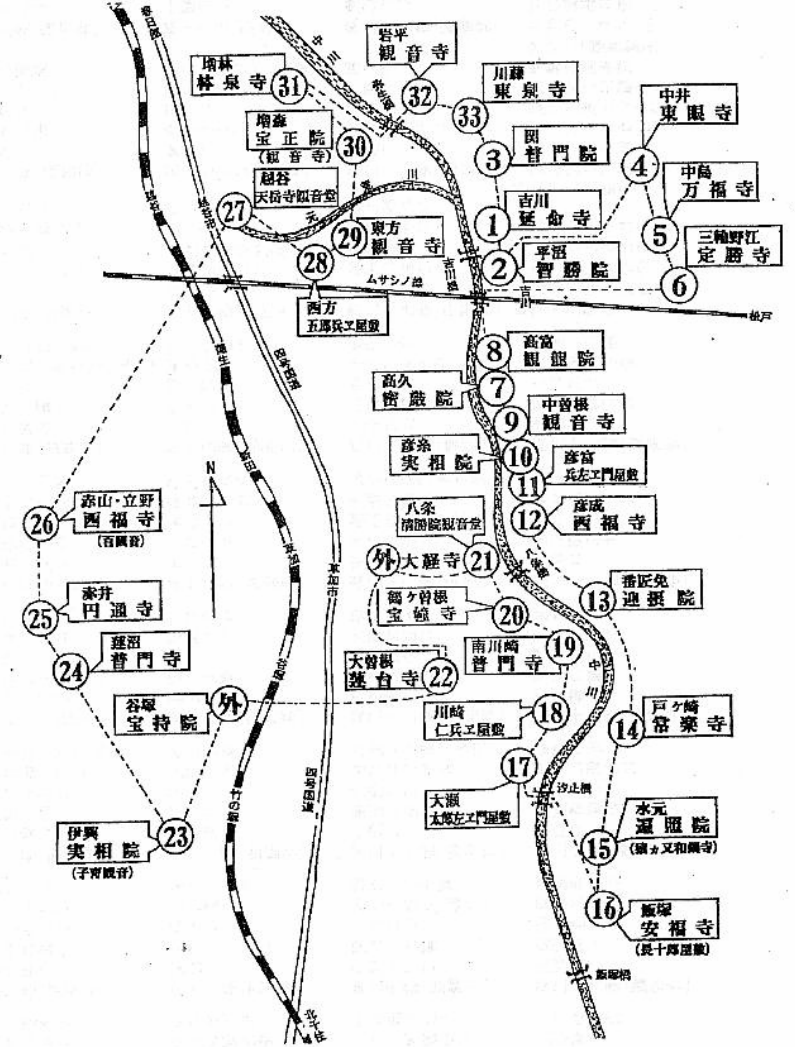
第九番「観音寺」
野も山も
大悲の網に
引かれて来て
この中首根に
かかる巡礼

第十八番「石田寺」
一般の
船に大悲の
竿さして
遍く照らす
法の川崎

第二十七番「観音堂」
気の払い
大悲の弓に
知恵の矢は
離さで悪魔
除く越ヶ谷

文責 NPO 法人
越谷市郷土研究会
加藤 幸一

—武蔵國三十三所順礼略図—



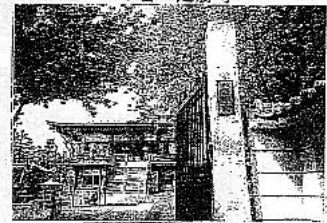
越谷市郷土研究会・高崎力氏の作成資料より



6番 定勝寺



1番 延命寺



7番 密蔵院



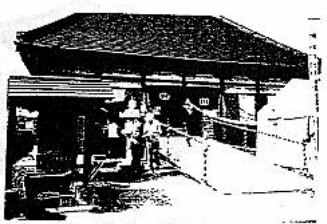
2番 智勝院



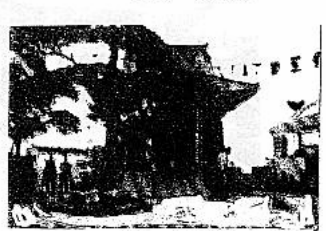
8番 観龍院



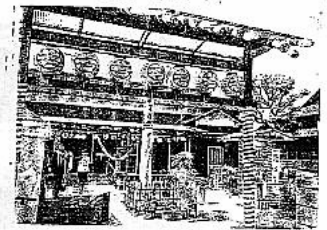
3番 普門院



9番 観音寺



4番 東眼寺



10番 実相院



5番 万福寺



26番 西福寺



27番 天獄寺



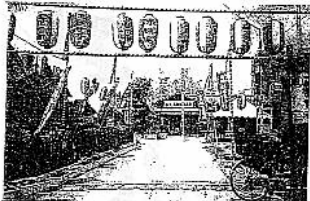
28番 五郎兵衛屋敷



29番 観音寺



30番 宝正院



21番 清勝院



22番 蓮台寺



23番 実相院



24番 音門寺



25番 円通寺



16番 安福寺



17番 太郎左門屋敷



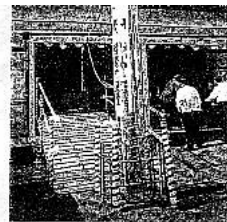
18番 仁兵衛屋敷



19番 音門寺



20番 宝幢寺



11番 兵左門屋敷



12番 西福寺



13番 迎攝院



14番 常楽寺



15番 遍照院

江戸・明治の越ヶ谷町・大沢町の大火

高崎 力

江戸時代の火災の記録をみると、江戸時代は、大沢町を含む越ヶ谷宿で、大きな火災が十三年に一度程度起こっていたことがわかる。

元文四年の火災では、後に放火犯が捕らえられて町内引き回しの上、六本木堤で火あぶりの刑に処せられている。越谷市役所西側の南北の道路は古くからの元荒川の土手道で、赤山道に通じる東西の道がこの土手道と合流した地点の北東角地、現在のコンビニ「セブンイレブン」あたりが「六本木」と呼ばれた所で、高札場が立ち、処刑場もあった所である。安永七年の連続放火では、大沢町の名主江沢家、大沢町の島根家などの連続放火犯が捕らえられ、大房村河原で火あぶりの刑に処せられた。

明治に入ると、明治七年の釘屋火事と明治三十二年の芋金火事の二つがあげられる。

釘屋火事では、十月二十日の午前二時頃、越ヶ谷本町の釘屋から出火し、越ヶ谷町が全焼した。家屋三百十五戸、土蔵八十六棟、物置十八所、堂宇二軒、死者二名、全戸数の五十四%焼失。瓦曾根村は百三十一戸の内、八十戸焼失(六十一%)し、被災者は二百十四軒、八百九十七人に及んだ。

芋金火事では、二月九日夜半、越ヶ谷本町三丁目西側の焼芋屋「芋金」の灰置場から出火し、家屋百十二戸、土蔵五棟、物置三所焼失した。その内、塗市小泉市右衛門、小間物小松屋、新聞雑誌協立舎、料理屋角半、旅人宿河内屋、紀の国屋は新築したばかり。小松屋は家具を土蔵に入れたが土蔵が焼けた。町役場と鈴木銀行も焼くが金庫は大丈夫だった。

越ヶ谷町・大沢町の火災発生の年表

元禄 四年 (一七〇二)	大沢町大火
元文 四年 (一七三九)	越ヶ谷袋町より出火し、瓦曾根村まで焼失
延享 二年 (一七四五)	大沢町下宿焼失
延享 五年 (一七四八)	大沢町火災
安永 元年 (一七七二)	大沢町中宿 (現在の沢二丁目) 焼失
安永 三年 (一七七四)	大沢町火災
安永 七年 (一七七八)	この頃、大沢町の連続放火の発生
天明 三年 (一七八三)	大沢町の九十三軒が焼失
寛政 六年 (一七九四)	越ヶ谷町大火
文化 三年 (一八一六)	大沢町の百九十八軒が延焼
嘉永 三年 (一八五〇)	越ヶ谷本町火災
安政 五年 (一八五八)	越ヶ谷町の三十八軒が焼失
明治 七年 (一八七四)	釘屋火事
明治 三二年 (一八九九)	芋金火事

よみがえる90年前の越谷

大正時代の国産卓上電話機と越ヶ谷電話番号簿

原田民自

越谷地域で電話通話が開始されたのは、今から一〇〇年前の明治四十一年（一九〇八）七月。当時の電話の管轄は越ヶ谷郵便局であった。翌年には電話通話交換業務もはじまり、電話の加入者も増大して、大正五年（一九一六）には四十七名を数えた。

写真の電磁式電話機は、電話機本体についているハンドルを回すことで内部の発電機が回り電気を発生させ、交換台につなげて相手先の電話機のベルを鳴らすというもの。通話が終わったらハンドルを2〜3回回転させ交換手に知らせるという仕組み。電話機の裏面の銘板を見ると、東京の沖電気が大正十五年に製作したことがわかる。

写真の電話機は送話器と受話器が連結された一体型となっており、送受話器の握りの部分には模様が彫刻され、本体部分は木製で表面に金箔を施した優雅なつくりの、装飾品としても役立つようデザインされている。当時の越谷でもこのような電話機が使われていたと想像される。

大正五年（一九一六）当時の電話料金は大宮・浦和・粕壁・岩槻・野田への通話は金十銭、呼出し料金も十銭。東京への通話が十五銭、呼出し料は十銭であった。

大正十年（一九二一）の越ヶ谷特設電話加入者名簿をみると、越谷地区の旧日光街道で商売を営む住民が多くを占めているのがわかる。



卓上電話機裏面の銘板 東京・沖電気製 大正15年製



テルビル磁石式甲式卓上電話機(送話器のホーン欠)

東京逓信局

注意事項
 通話の心得 (各) 一
 電話機消毒方の心得 (各) 一

次 目

入間川ノ部	一
岩槻ノ部	一〇五
羽生ノ部	一〇九
飯能ノ部	一一三
鳩ヶ谷ノ部	一一七
所澤ノ部	一二一
秩父ノ部	一二五
小川ノ部	一三〇
大宮ノ部	一三三
蕨ノ部	一三七
加須ノ部	一四一
柏壁ノ部	一四五
寄居ノ部	一四九
吉川ノ部	一五三
久喜ノ部	一五七
栗橋ノ部	一六一
深谷ノ部	一六五
尾玉ノ部	一六九
鴻巣ノ部	一七三
越ヶ谷ノ部	一七七
上尾ノ部	一八一
幸手ノ部	一八五
駒西ノ部	一九〇
宮浦ノ部	一九四
杉戸ノ部	一九八

電話通話規則 (表) 一〇
 特設電話規則 (同) 一〇
 準用電話規則抜萃 (同) 一〇
 申請書ノ式 (同) 一〇
 電話送電報の心得 (同) 一〇

大正十年九月改

埼玉縣下各地特設電話番號簿

越ヶ谷

川上登三郎	大澤七三三	運	藥
早川三郎	越ヶ谷、四五一	備	料
大野伊右衛門 備屋本店	出羽、四二五	材	木
井橋太郎 兵衛 釘太	越ヶ谷、一八	味	噌
會田吉五郎 三六七	越ヶ谷、三七	吳	單
水川貯蓄銀行越ヶ谷支店	越ヶ谷、四六六〇		
帝國瓦斯力電機株式會社越ヶ谷支店	越ヶ谷、一三七		
出羽村役場	出羽、四丁野田五	運	藥
中村藤吉	越ヶ谷、七二	運	藥
田中吉之助	越ヶ谷、三七	米	穀
柳屋八右衛門	越ヶ谷、一七	味	噌
齋藤益太郎	大相模、四方七七	味	噌
栢屋 兼井三郎	越ヶ谷、一五	花	物
清水治郎吉	越ヶ谷、四六〇〇	米	穀
武陽水陸運輸株式會社	蒲生、蒲生四四一	八三	
鐵道中井銀行越ヶ谷支店	越ヶ谷、四六九〇		
大松屋 兼井三郎	火曜、一〇	宣	商
桃木長藏	越ヶ谷、二七	米	穀
衛生村役場	蒲生、蒲生三一七		
越ヶ谷町役場	越ヶ谷、一五八四		
鈴木源兵衛	越ヶ谷、四五一三	米	穀
大野源兵衛 信屬	越ヶ谷、四五六六	米	穀
荒井吉右衛門	出羽、四丁野田	地	物
森田渡次郎	越ヶ谷、一五	米	穀
山崎泰助	越ヶ谷、四六八三	書	指

大正 10 年 (1921) 9 月 埼玉縣下各地特設電話番號簿 越ヶ谷/部 23~47

大正 10 年 (1921) 9 月改 埼玉縣下各地特設電話番號簿 東京逓信局 越ヶ谷/部

越ヶ谷特設電話加入者名及番號

越ヶ谷郵便局	越ヶ谷、二六三	米	穀
日進銀行越ヶ谷支店	蒲生、其會一		
中村泰左衛門	越ヶ谷、六〇	米	穀
山崎長右衛門 油長	越ヶ谷、四七〇	吳	單
小泉市右衛門 俊郎屋	越ヶ谷、四五八二	吳	單
會田善次郎 萬壽屋	越ヶ谷、九〇五	土	地
遠藤彌市	越ヶ谷、一〇八	吳	單
遠藤小兵衛 山田屋	越ヶ谷、二六三	料	理
高田武男 島田屋	越ヶ谷、二七七	醫	油
松木利兵衛	越ヶ谷、八		
山田直三郎 山田内村醫院	越ヶ谷、四六〇七		
埼玉町場	大澤村		
越ヶ谷警察分署	大澤、一	料	理
大山伊之吉 備屋	越ヶ谷、四五六五		
森田彰代藏 日陽盛醫院	越ヶ谷、二五七		
山口静衛 松花堂醫院	越ヶ谷、一八九〇/二	料	理
山口静衛	越ヶ谷、四二九	料	理
柳瀬芳五郎 天芳	越ヶ谷、四五四〇	料	理
木村藤吉 加賀屋	大澤、七一六		
越ヶ谷停車場	越ヶ谷、四五一	白	木
中村順二郎	蒲生、五曾根七	材	水
藤田善兵衛 越ヶ谷屋	越ヶ谷、四五六九	需	商
會田太助 嚴治屋			

大正 10 年 (1921) 9 月 埼玉縣下各地特設電話番號簿 越ヶ谷/部 1~22

越ヶ谷

東武鐵道株式會社	越ヶ谷、七〇八		
越ヶ谷區裁判所	越ヶ谷、四六六〇		
越ヶ谷運輸株式會社	越ヶ谷、七〇九		
高橋巖藏	越ヶ谷、二五八	酒	
石垣新藏	越ヶ谷、二九四	地	物
小林七左衛門	大澤、四二	料	理
上野幸太郎	越ヶ谷、六四	米	穀
有澤七藏	越ヶ谷、七一	料	理

大正 10 年 (1921) 9 月 埼玉縣下各地特設電話番號簿 越ヶ谷/部 48~55

